

理想とする「歴史小説」

「歴史小説家」のありかた

——『蒼き狼』論争における大岡昇平の言説——

尾 添 陽 平

一

『蒼き狼』論争は、大岡昇平が「群像」一九六一年一月に発表した『「蒼き狼」は歴史小説か』で井上靖「蒼き狼」(『文藝春秋』一九五九年十月～一九六〇年七月)を批判したことをきっかけに、一九六一年の一月から三月の「群像」誌上を舞台にして『蒼き狼』の評価をめぐり、大岡と井上との間で争われた文学論争のことである⁽¹⁾。

『蒼き狼』論争はこれまで、「まことに物足りない」⁽²⁾(重松泰雄)「ごく穏やかな、むしろあつさりとしすぎた論争であった」。(中略)「論争はあつけなく終わりを告げる」⁽³⁾(柴口順二)という指摘がされている。『蒼き狼』論争が「あつさり」と展開し「あつけなく」終わりを告げた要因として、大岡の批判には、「最初に断わっておくが、私は「蒼き狼」が会心作だとも、勿論これが歴史小説の見本だとも思っていない。歴史小説として、あるいは更に広く文学作品として、「蒼き狼」が未熟な作品であるという批評には、事実それはその通りであろうと作者自身思うし、黙って

引き退がる以外仕方ない。大岡氏の文章のそうした部分は、そのまま素直に受けとるに聊かも吝かでないつもりである。(中略)氏の文章の底を流れている私への忠告や好意は、私はあまさず読みとっているつもりである」(『自作「蒼き狼」について』「群像」一九六一年二月)と述べ、極めて低姿勢で応答し、大岡の再批判である『成吉思汗の秘密』(「群像」一九六一年三月)には、反論することなく沈黙を通した井上靖の論争にのぞむ態度があげられるであろう。

『蒼き狼』論争は、多弁に『蒼き狼』を批判する大岡と、対照的に、大岡に反論することに積極的でなく、大岡の挑発に乘ろうとしなかった井上の論争にのぞむ態度により、「大岡のひとり舞台的感じ」⁽⁴⁾のまま幕を下ろされる。

確かに『蒼き狼』論争は、結果として「あっさり」展開し、「あっけなく」終わりを告げた論争であつたかも知れぬ。しかし、「歴史小説」「歴史小説家」のありかたという極めて大きな問題を争点にした論争⁽⁵⁾であり、戦後の重要な文学論争の一つである。また『蒼き狼』論争は、多くの「歴史小説」論「歴史小説家」論を発表することになる大岡昇平⁽⁶⁾が、最初にまとまった形で「歴史小説」論「歴史小説家」論を発表した機会ともなったのである。本稿では、一九六一年、『蒼き狼』論争時における大岡の言説を検討し、「歴史小説」「歴史小説家」のありかたをめぐって争われたこの論争の中で、大岡がどのように論を展開していったのか、考察していきたい。

二

大岡昇平の『蒼き狼』批判は、『常識的文学論』と題された、昭和三十六年一月から十二月にかけて一年間十二回に渡って「群像」誌上に連載された文芸時評の第一回と第三回で発表された。この『常識的文学論』の「常識」の意味するところについて、大岡は『常識的文学論』第一回『「蒼き狼」は歴史小説か』冒頭において、以下のように述べている。

先頃福田恆存が「常識に還れ」と叫んで、安保デモに関する報道の感情的偏向を戒めたが、わが「常識的文学論」の「常識」の意味するところも、ほぼこれに近い。(中略)／私は題名通り、「常識」をモットーにして、書くつもりだが、常識は中立と同じくムードである。原理も持たねば、公式もない。時の勢いに流されず、平常心を保つということも、容易ではないかもしれないが、やはり一つの感情に帰するのは、福田の論文がよくそれを示している。

大岡はここで、ちょうど「常識に還れ」と叫んで、安保デモに関する報道の感情的偏向を戒めた」福田恆存のよ
うに、自分も容易なことではないが、「時の勢いに流されず、平常心を保」ちながら批評をしていくつもりであると述べている。

福田は「常識に還れ」(『新潮』一九六〇年九月)において、安保闘争を指導した人々を批判し、「私は今度の『新安
保阻止運動』を『国民的エルギーの結集』とする途方もない嘘は受け入れられない」と述べたが、大岡は、必ずしもこの福田の政治的立場に共鳴していたわけではない。「もっとも安保問題については、意見を異にする」⁽⁷⁾と述べており、政治的立場は異なることを述べている。ここで大岡は、反・反安保という福田の政治的立場ではなく、安保闘争の嵐が吹き荒れる中で、時勢の流れに合わせ自らの立場をいたずらに変えていくのではなく、自らの固く信ずるところの「常識」を貫いている福田の態度を支持しているのである。

当時福田は、「私は大衆なんていうものは信じない」「大衆は訳の解らぬものである」⁽⁸⁾と述べる「大衆」批判者であった。時勢に流されることを厭い、平常心を保ち、自らの固く信ずるところを貫く福田の「常識」という態度を支持すると述べた大岡は、『常識的文学論』の中で「大衆文学」について論じ⁽⁹⁾、「大衆文学」を「読者の要求に応えるという意味で阿諛の一形式であり、阿諛は常に人を墮落させるのである」⁽¹⁰⁾と批判している。「大衆」批判者である福田の「常識」という態度を支持し、自らも「常識」をモットーとするという戦略を述べた大岡が、「常識」という言

業がタイトルに入った『常識的文学論』において批判の対象にするのは、「訳の解らぬ」存在でしかない「大衆」に阿諛したと大岡の目に映った作品・人物であろう。

大岡は『蒼き狼』は歴史小説か』において、『蒼き狼』は以下のような作品であると結論付けている。

結局、『蒼き狼』一篇が、一番よく似ているものは、『十戒』から『ベン・ハー』にいたるアメリカのスペクタクル映画である。（中略）歴史性、叙事性、道徳性、残虐性、エロチシズム、なに一つ欠けたものはないが、すべてヴィスタヴィジョンにうつった影が現代の観衆の口に合うように料理されているにすぎない。

大岡は『蒼き狼』を「現代の観衆に口に合うように料理されているに過ぎない」と批判する。ここで大岡に批判的に取り上げられた『十戒』『ベン・ハー』といったアメリカのスペクタクル映画は、当時いずれも大ヒットを飛ばし、「大衆」を動員した映画であった⁴¹⁾。大岡は『蒼き狼』を、『十戒』『ベン・ハー』を観に映画館に足を運んだ「大衆」と呼ばれる存在の口に合うように料理された小説、『十戒』『ベン・ハー』の大ヒットという時の勢いの流された小説に過ぎないと批判したのである。

『蒼き狼』は歴史小説か』の最後で大岡は以下のように述べる。

ただそれ（引用者註…井上が発表するかもしれない元朝興亡史）を歴史小説にするためには、井上氏は「蒼き狼」の安易な心理的理由づけと切り張り細工をやめねばならぬ。何よりもまず歴史を知らねばならぬ。史実を探るだけでなく、史観を持たねばならない。

大岡は井上に対して「史実を探るだけでなく、史観を持たねばならない」と述べる。大岡は、「現代の観衆の口に合うように料理され」た、いわば「大衆」に阿諛する小説『蒼き狼』の作家・井上靖が、時勢の流れとは関係のない確固たる信念による「歴史」のとらえかた、すなわち「史観」を有していないとする。「史観」を有していない井上

靖による『蒼き狼』は「歴史小説」であると言えないとし、今後井上が「歴史小説」記述するためには、井上が何よりまず「史観」を有することが必要だと述べるのである。

大岡は『蒼き狼』論争時、井上を批判しつつ「歴史小説」の記述者である「歴史小説家」の有すべきものについて述べた。「歴史小説家」は、時勢の流れとは関係のない確固たる信念による「歴史」のとらえかた、すなわち「史観」を絶対的に有していなければならぬと主張しているのである。しかし「史観」の背景となるイデオロギーの当否ということについて、大岡は、『蒼き狼』論争時には言及していない。

三

大岡昇平は『蒼き狼』は歴史小説か』において、「歴史小説」の記述者である「歴史小説家」がとるべき態度について、以下のように述べている。

小説家はその人物（引用者註…「歴史小説」が記述する「歴史的人物」）を現代にはもはやない条件の間におくことによって、異常な葛藤の中に投げ込み、欲望を解放することが出来るが、それは読者の側の、昔は勝手なことが出来たらしいという歴史的先入観に助けられて、はじめて可能なのである。歴史的事実には尊敬を払わなければ、イリュージョンは消え、作品は歴史でもなければ、小説でもないという、空虚の中に落ち込む。

大岡は、「歴史小説」の記述者である「小説家」が「歴史的事実には尊敬が払わなければ、イリュージョンは消え、作品は歴史でもなければ、小説でもないという、空虚の中に落ち込む」と述べ、「歴史小説」を空虚の中に落ち込ませないため、「小説家」は「歴史的事実」に尊敬を払わねばならないとする。一方で大岡は『蒼き狼』は歴史小説か』において、『蒼き狼』には、井上靖による主史料『元朝秘史』原文の「改竄」があるとしている。『蒼き狼』を、

井上による『元朝秘史』改竄により、「歴史的事実」に尊敬が払われていない空虚の中に落ち込んだ「作品」であるとし、同時に『蒼き狼』を空虚に落ち込んだ「作品」にした「小説家」井上靖を批判している。

大岡の批判を受け、井上は『自作「蒼き狼」について』を発表し、大岡に反論する。

厳密な意味で成年期までの成吉思汗についての史的記述は、宋史の何ヶ所かに出て来る何行かのもの以外ないのであるから、史実だけで成吉思汗の伝記を綴ることは不可能である。

井上は、「厳密な意味で成年期までの成吉思汗についての史的記述は宋史の何ヶ所かに出て来る何行かのもの以外ない」とする。ただし、『宋史』の何行かだけでは「成吉思汗の伝記を綴ることは不可能である」から、成吉思汗の伝記を綴るため『宋史』以外の史料を使ったとする。

井上は「読者のために『元朝秘史』なるものをちょっと説明しておく」と述べ、『元朝秘史』に対する自らの見解を披露する。

成吉思汗や成吉思汗以前のモンゴル民族のことを知る上には、この書物が貴重な資料であり、これを無視することはできないが、併し、ここではつきりしておきたいことは、重要な資料ではあるが、決して史実ではないということである。つまりここに書かれてあることは正確な歴史的記述ではない。／古来モンゴルあるいは成吉思汗の研究家は、この書を無視することはできないが、これをそのまま歴史的記述として取り扱うこともなければ、事実取扱ってもいけないのである。（中略）作家の私の、これら資料に対する態度も、歴史家のそれと同じでなければならない。

井上は『元朝秘史』を「重要な資料ではあるが、決して史実ではない」「書かれてあることは正確な歴史的記述ではない」「古来モンゴルあるいは成吉思汗の研究家は、この書を無視することはできないが、これを歴史的記述として取り扱うこともなければ、事実取り扱ってもいけない」ものであるとする。そして「作家」井上の「資料に対する態

度も、歴史家のそれと同じでなければならぬ」とし、「作家」井上靖は、「歴史家」と呼ばれる人々の見解を踏襲し、『元朝秘史』を正確な歴史的記述として取り扱わないと述べる。

大岡氏は「元朝秘史」というものに対して、何か思い違いがあったのではないかと思う。

井上は、大岡が『元朝秘史』を正確な歴史的記述として取り扱っているのではないかとし、それを「思い違い」とする。井上にとって成吉思汗に関する正確な歴史的記述は、『宋史』の数行だけで、『元朝秘史』は正確な歴史的記述ではない。井上は、『元朝秘史』に記述してある事柄を「自由に作品の中で生かしている」とする。正確な歴史的記述とする『宋史』の記述を変更したのならともかく、正確な歴史的記述ではないとする『元朝秘史』の記述を「作家」が自由に変え、「作品」に生かそうとしたところで何の問題があるのかと大岡に反論するのである。

また井上は『自作「蒼き狼」について』の中で大岡に反論するため、一九六〇年六月「別冊文藝春秋」に発表した『「蒼き狼」の周囲』という文章の一部を引き、以下のように述べる。

『元朝秘史』と並んで蒙古文学の双璧と称せられているものに「蒙古源流」という古書がある。(中略)／それからもう一つ「アルタン・トプチ」というのがある。(中略)／両方とも史実は混乱しており、「元朝秘史」の記述と重なったり、倒錯したりしているところが多いが、ただ蒙古民族の持っていたもので、現代人が絶えずそれに触れていない限り、すぐ離れてしまいそうなものもやしたもの、この二つの書物にはいっぱい詰まっている。そうした意味で、私は「元朝秘史」と共に、この二つを座右に置いた。

ここで井上は、『元朝秘史』のほかに『蒙古源流』『アルタン・トプチ』を『蒼き狼』記述の際、史料として使用したと述べている。大岡は『元朝秘史』のみを指摘し、史料の改竄があると批判するが、『元朝秘史』の記述とは「重なったり、倒錯したりしているところ」があるが「蒙古民族の持っていたもので、現代人が絶えずそれに触れてい

い限り、すぐ離れてしまいそうなもの」が記述されている『蒙古源流』『アルタン・トブチ』を、『元朝秘史』と共に座右に置きながら記述した作品が『蒼き狼』であり、『元朝秘史』の記述改竄の指摘に執着すべきではない、と大岡に反論しているのである。

井上の反論に対して大岡は『成吉思汗の秘密』を発表、「成吉思汗没後わずか十三年」で成立した『元朝秘史』は「明末清初の『アルタン・トブチ』や『蒙古源流』とは格が違う」と、『元朝秘史』の史料価値の高さを指摘する。

大岡は『成吉思汗の秘密』において井上による史料価値の高い『元朝秘史』改竄を改めて批判し、以下のように述べる。

「元朝秘史」の記述が史実だとは、私はどこにも書いていない。「原文」と書いただけで、それが「古事記と同じ目的で成立した王家の歴史」と論文の初めの方に書いてある。(中略)従ってここに私の「思い違い」を空想するのは、氏が私の言うことを理解していないか、私を誹謗することによって、自作を護ろうとしているか、どっちかである。(中略)／「元朝秘史」は歴史ではないにしても、その中に真実がないとは言えない。成吉思汗が死後昇天したのは偽りにしても、狼についての記述は真実である。それは「古事記」の神武東征が史実でないにしても、八咫鳥が先導したという記事は古代日本人が鳥をどういう鳥と考えていたかを示す、民俗学上の真実である。

大岡は『元朝秘史』の記述が史実だとは私はどこにも書いていない。「原文」と書いただけ」と述べ、『元朝秘史』が『古事記』の類の「王家の歴史」であることは承知していることだと述べる。柴口順一も指摘しているが、「史実」ということばをふんだんに使っているのは井上の方¹⁰²である。大岡は『蒼き狼』は歴史小説か』において「原文」ということばを使っており、『元朝秘史』が「史実」を記した正確な歴史的記述であるなどとは、どこにも書いていない。大岡は、井上の反論が自分の言っていることを「理解していない」上で成立していると批判する。そし

て、「王家の歴史」であり、誰もが正確な歴史的記述とは考えていない『古事記』の記述が、「歴史的事実」を全く記述していないというわけではなく、『古事記』が記述している時代の「歴史的事実」に近づく上での何かしら重要な事柄を記述していることと同じように、『元朝秘史』も、いくら正確な歴史的記述とは言えないとしても、成吉思汗の時代の「歴史的事実」に近づく上での重要な記述があるのではないかと述べている。ここで大岡は、井上が、『元朝秘史』は正確な歴史的記述ではないから自由に変えてもいいではないか、と反論してきたことに対して、井上は『元朝秘史』を正確な歴史的記述ではないということだけで安易に退けすぎている、『元朝秘史』には「歴史的事実」に近づく上での重要な記載があるかも知れぬから史料を尊重して扱うべきだ、と井上の『元朝秘史』という史料にのぞむ態度を再批判しているのである。

曾根博義は、『蒼き狼』論争時の大岡昇平の態度を以下のように述べる。

要するに大岡昇平は『蒼き狼』が『元朝秘史』の記述に忠実でないから、史実を改変していることになり、歴史小説とはいえないといっているわけだが、『元朝秘史』そのものが成吉思汗研究の不可欠な史料ではあっても正確な史実を記したものであるとすれば、大岡昇平の批判はまったく的外れということにならざるを得ない。(中略)最初に意気込んで攻撃した手前、引つ込みがつかず、再反論では強弁を繰り返して、争点を離れて口数が多くなっているだけのように見える。(中略)『元朝秘史』が史実の記録ではないことは、その後、トルコ学者の護雅夫によって専門家の立場から証言された。⁽¹³⁾

曾根は、大岡の『蒼き狼』批判を『蒼き狼』が『元朝秘史』の記述に忠実でないから、史実を改変していることになり、歴史小説とはいえないといっている」とまとめる。一方で、井上と同じ立場に立ち、『元朝秘史』を「専門家の立場から証言され」ている「史実の記録ではない」史料だとする。『元朝秘史』が正確な歴史的記述ではないということは「専門家」も認めているところなのだから、「専門家」の判断に従って『元朝秘史』を取り扱ったところ

で、大岡が言うような「史実の改変」などということにはならないとし、大岡の『蒼き狼』批判を「まったく的外れということにならざるを得ない」、再批判を「強弁を繰り返し、争点を離れて口数が多くなっているだけ」だと述べる。曾根は、大岡の『蒼き狼』論争時の態度を批判、井上を擁護するのである。

しかし大岡は、前述したように『元朝秘史』が正確な歴史的記述などとは言っていない。『元朝秘史』が、正確な歴史的記述ではないと「専門家」から判断されていようと、それが、成吉思汗を記述していく上で必要不可欠な史料であるということに着目し、必要不可欠である史料には、正確な歴史的記述でなくとも、「歴史的事実」に近づく上での何らかの重要な記述があるはずであるとする。「歴史小説」の記述者である「歴史小説家」は、「歴史小説」の記述の際、必要不可欠な史料に対して「歴史家」の判断を安易に踏襲するのではなく、正面から対峙し、自ら判断を下すべきであると主張している。

『蒼き狼』論争時に述べられた大岡と井上の史料に対する態度の違いから、大岡、井上双方の「歴史小説家」論が見えて来る。井上の「歴史小説家」論は、「歴史家」と「歴史小説家」というものを明確に分けている。史料などに判断を下す「歴史家」という存在を前提とし、「歴史家」の判断を受け入れる形で「歴史」を小説として記述する「歴史小説家」が存在するという見解である。それに対して大岡の「歴史小説家」論は、「歴史家」を「歴史小説家」の前提条件にはしておらず、「歴史家」と「歴史小説家」との間に明確な差異はない。「歴史家」であろうと「歴史小説家」であろうと「歴史」を記述していくもののは、記述していく際に使用する史料に自ら積極的に判断を下しながら「歴史」を記述すべきだと主張しているのである。

四

大岡昇平は『蒼き狼』は歴史小説か』において、「歴史的人物を人間的に書くのを原則」とする「歴史小説」における「人間」と「歴史」の関係は、以下のようなものでなければならぬと述べる。

小説は必ずしも歴史的事実にこだわる必要がないにしても、人間が歴史を作り、また歴史に作られるという相互関係がなければ、そもそも人間を歴史的環境におく必要はないわけである。

大岡は「人間が歴史を作り、また歴史に作られるという相互関係がなければ、そもそも人間を歴史的環境におく必要はないわけである」と述べる。たったの一人の英雄的人物によって、ある「歴史的事実」が生じ、それが「歴史」として語り継がれていくわけではない。「人間」と「歴史」との関係は、「人間」が「歴史」を作りもするし、「歴史」が「人間」を作りもするという「相互関係」にあるとするのである。『蒼き狼』の主人公・成吉思汗だけが、「人間」と「歴史」の関係性から外れる特殊な「人間」だというわけではない。成吉思汗も他の例に漏れることなく「人間」と「歴史」の相互の関係性に取り込まれる人物であり、「人間」と「歴史」の間の「相互関係」を認識した上で、記述されていく人物であるとしている。

大岡は、『蒼き狼』に記述された成吉思汗について、「ロマンチックに描きすぎ」「その主人公を氏が現代の動物小説から得た狼の観念に引きよせようとしている」と批判する。そして、成吉思汗と彼による蒙古民族統一、そして蒙古軍のユーラシア大陸遠征について、自らの見解を以下のように述べる。

彼（引用者註…成吉思汗）の統一は「狼」の原理に忠実であつたためではなく、氏族連合体を、専制君主制による軍事国家に編成替えしたことによって可能であつた。遊牧を掠奪という。より手取り早い生産様式に代えたことである。／度々の遠征

は、モンゴルの牝鹿を美しくするためではなく、君主の財産を増し、親衛隊を養うためである。十三世紀のユーラシアの北部では西方にトルキスタンの豊かな商業国があり、東には金国が繁栄していた。沙漠と草原を統一して隊商の通行の危険を除くことが要求されていた。

大岡は、成吉思汗が「氏族連合体を、専制君主制による軍事国家に編成替えたことによって」「遊牧を掠奪という。より手取り早い生産様式に代えたこと」によって蒙古民族は統一されたとする。成吉思汗という「人間」により蒙古民族は統一の道を行んだということを述べてはいるが、それは、「狼」の原理に忠実たらんというような成吉思汗の個人的感情に回収されるようなものではない。国家形態、経済様式という環境の変化によってもたらされたものであるとし、成吉思汗は確かに、環境の変化を促した「人間」ではあるが、一方で彼は、彼を取り巻く環境に取り込まれた「人間」でもある。また蒙古軍遠征は、「モンゴルの牝鹿を美しくするため」というような単純な構図に回収されるようなものではないとする。「君主の財産を増し、親衛隊を養うため」という蒙古民族国家の事情、そして「沙漠と草原を統一して隊商の通行の危険を除くこと」という十三世紀のユーラシア情勢の「要求」によるものである。つまり成吉思汗による蒙古民族統一、蒙古軍の遠征には、それを「要求」する環境があったのである。たしかに成吉思汗は、蒙古民族統一者として「歴史」を作った「人間」である。しかし、蒙古民族統一と蒙古軍遠征は当時のユーラシア情勢の「要求」であり、一方で蒙古民族統一者としての成吉思汗は、「歴史」によって作られた「人間」であるともいえる。

かかる歴史的事件（引用者註…蒙古民族統一と蒙古軍の遠征）を達成した人間は、利害に明るい、レアリストでなければならぬというのも、また、われわれの常識の告げるところである。必要なのは「狼」ではなく、冷静な認識者である。

大岡は、成吉思汗が「利害に明るい、レアリスト」「狼」ではなく、冷静な認識者」として記述されるべき「人

間」であると述べる。「人間」と「歴史」が相互関係にある以上、成吉思汗は、ある「歴史的事件」から語り継がれていく「歴史」を、一人で作り上げ支配するような英雄と表出されてはならない。成吉思汗は、「われわれの常識」とかけ離れた英雄としてではなく、「われわれの常識」に十分収まりきる「人間」として表出されなければならないとするのである。

井上は、「蒙古民族の興隆が全く成吉思汗という一人の英雄にその総てを負うていることが判った」⁽¹⁴⁾と述べている。井上の「全く成吉思汗という一人の英雄にその総てを負うている」というような「歴史」のとらえかたは、井上の「史観」であるといえるのかもしれない。しかし井上のような、蒙古民族興隆という「歴史」を成吉思汗一人に回収していくようなとらえかたは、「人間」と「歴史」とは「相互関係」にあるという大岡にとり、容認できないものであった。大岡の『蒼き狼』批判、井上靖批判には、「常識」からかけ離れた一人の英雄が設定され、その英雄に「歴史」を回収させるような歴史記述への批判の姿勢が現れている。「歴史」を単一の平面に回収させるような歴史記述を批判する大岡⁽¹⁵⁾は、「歴史」がどこにも回収されないような立体多面的な歴史記述を理想とするのである。

前述したが、大岡昇平は『蒼き狼』論争において、「歴史小説家」は「史観」を持たなければならないと述べた。しかし、『蒼き狼』を「歴史」が英雄・成吉思汗という単一の平面に回収される「歴史小説」であると批判した大岡にとって、「歴史小説家」の「史観」を前面に押し出した「歴史小説」は、「歴史小説家」の「史観」という単一の平面に回収される記述の「歴史小説」であり、それは当然批判の対象となる。そこで大岡は、「歴史」を立体多面的に記述していくべきだと主張する。「歴史」を立体多面的に記述していくことは、「歴史小説家」の「史観」という平面とは違う平面で「歴史」を記述することが要求される。「歴史小説」の中に「歴史小説家」の「史観」に検討が加えられた記述が存在することにより、「歴史小説」というレベルにおいて「歴史小説家」の「史観」は、「歴史小説」に

記述された「歴史」を回収するのではなく、記述された「歴史」の構成要素の一つであるという状態にあるのである。

つまり大岡は、「歴史小説家」というレベルにおいては、「史観」を有していなければならないと主張するが、「歴史」を実際に記述するレベルにおいては、「歴史」を立体多面的に記述していくべきだと主張する。「歴史小説家」の「史観」は、立体多面的な歴史記述により、「史観」とは違う平面の記述によって検討がなされ、「歴史」を回収するものではなくなる。そして「歴史小説」というレベルでは、「歴史」が単一の平面に回収されるような「歴史小説」は否定され、立体多面的な歴史記述による「歴史」がどこにも回収されることのない「歴史小説」を理想とするのである。

五

以上『蒼き狼』論争時における大岡昇平の言説を見てきたが、多弁に『蒼き狼』を批判する『蒼き狼』論争時の大岡の態度について、柴口順一は、以下のような指摘している。

いわゆる歴史的事実について述べるならば、やはり他の歴史的資料を用い、ある程度の歴史学的手続きを踏んで説明するのが筋であろう。論を見る限り、大岡はドーソンの『蒙古史』と小林高四郎の『ジギスカン』くらいしか読んでいない。前者は早くから岩波文庫に入っており、後者は岩波新書にある。そしてこの点では井上靖の方がはるかに多くのものを読んでいたのはいうまでもない。¹⁶⁾

大岡は『成吉思汗の秘密』において、井上靖の『蒼き狼』の周囲「という文章の存在を知らないまま『蒼き狼』批判していたことを認めている。柴口の指摘のように、大岡は容易に手に入れることのできた「ドーソンの『蒙古

史」と小林高四郎の『ジングスカン』くらいしか読んでいない」状態で『蒼き狼』を批判しており、それは論争を行なうものの態度として「ずさん」⁽⁴⁾なものであったと言わざるを得ない。しかし一方で、大岡より「はるかに多くのものを読んでいた」井上は、攻撃材料ともなるはずの大岡の「ずさん」な態度を指摘することなかった。前述したように、低姿勢の応答に終始ということが事実である。『蒼き狼』論争は、論争の当事者双方の態度に問題があった論争であるといえる。

論争としては消化不良のまま終わりを告げ、また、論争当事者の論争にのぞむ態度にも問題点が指摘できるなど、『蒼き狼』論争は多くの問題を問題として残したままの論争である。しかし、大岡は、一九六一年に『蒼き狼』とその作家である井上靖という批判対象を発見し、実際に批判していくことにより、初めて公の場で「歴史小説」および「歴史小説家」の理想的なありかたについて述べたのである。

大岡の『蒼き狼』論争時の言説とは、まず「歴史小説」の記述者である「歴史小説家」は、いかなるイデオロギーを背景にしてもよいが、時の勢いに流されて変わることのないような歴史のとらえかた、「史観」を有しているべきだということである。次に、「歴史小説家」は「歴史小説」を記述する上で使うことになる史料に対して、「歴史家」の見解に無条件で従うというような安易な判断を下すのではなく、自ら判断を下し、尊重して扱うべきだということである。「歴史小説家」は史料に対して自ら判断を下すことにより、「歴史小説家」がその決定に従うべきとする「歴史家」の存在を前提にはしておらず、「歴史家」と「歴史小説家」との間に明確な差異はなくなっている。そして「歴史小説家」というレベルでは、「史観」を有しておくべきだとするが、「歴史小説」というレベルにおいては、「歴史小説家」の「史観」を前面に押し出したような、単一の平面に回収される記述の「歴史小説」は批判の対象とする。記述のレベルでは、「歴史的事実」を立体多面的に記述していくべきだと主張し、「歴史小説家」の「史観」には

検討が加えられ、「歴史小説」のレベルでは、単一の平面に回収されることのない「歴史小説」を理想的であるとするのである。

一九六一年の『蒼き狼』論争以降も、大岡は「歴史小説論」「歴史小説家」のありかたについて言及していく。以降の言説において大岡は、一九六一年の言説をどのように発展させていったのか、稿を改めて論じたい。

注(1)

高橋春雄は「蒼き狼」論争(解題)〔戦後文学論争下巻〕所収、一九七二年十月、番町書房)において、『蒼き狼』論争は、(一)大岡昇平「『蒼き狼』は歴史小説か」「群像」一九六一年一月、(二)井上靖「自作『蒼き狼』について——大岡氏の「常識的文学論」を読んで——」「群像」一九六一年二月、(三)大岡昇平「成吉思汗の秘密——常識的文学論(3)——」「群像」一九六一年三月、(四)山本健吉「歴史と小説」〔読売新聞〕一九六一年一月一八日夕刊、(五)大岡昇平「『蒼き狼』は叙事詩か」〔読売新聞〕一九六一年一月二十四日夕刊、(六)山本健吉「再び歴史と小説について」〔読売新聞〕一九六一年一月三十一日夕刊、(七)大岡昇平「国語問題のために」〔読売新聞〕一九六一年二月六日夕刊、(八)福田宏年「歴史小説の“真実性”とは?——『蒼き狼』論争への私見——」〔図書新聞〕一九六一年二月二十五日)の八編の文献で「ほぼ全容を伝えられていることになる」と指摘している。しかし重松泰雄は、「井上靖・大岡昇平論争」〔解釈と鑑賞〕一九七〇年四月)において、『蒼き狼』論争時の山本健吉の言及を「重要な副資料として逸することができない」ものではあるが「直接の文献ではない」、福田宏年の言及については「この論争に関して参考にするべき文章」であるという指摘をしている。つまり純粋に『蒼き狼』論争の文献といえるものは、大岡と井上との間で応酬された「群像」誌上の三篇であろう。

重松泰雄「井上靖・大岡昇平論争」(前掲)

柴口順一「『蒼き狼』論争のために」〔国語国文研究〕一九九七年七月)

重松泰雄「井上靖・大岡昇平論争」(前掲)

柴口順一「『蒼き狼』論争のために」(前掲)において、「争点となった問題そのものは決して小さくはなく、むしろ極めて大きいかつ重要な問題であった」という指摘をしている。

(6)

大岡昇平は、「文学界」に一九六三年六月から六四年十一月にかけて十三回連載した『現代小説作法』のうち八回（六三年九・十月、六四年三・四・六・七・九・十一月）で「歴史小説」について言及している。また一九七四年六月には「歴史小説の問題」（『文学界』）を発表、同年八月には「歴史小説の問題」（『文藝春秋社』）というタイトルのもと、『蒼き狼』論争から一九七四年までの「歴史小説」への言及をまとめ、単行本として刊行している。

(7)

大岡昇平「隣人・福田恆存」（『新潮』一九六一年九月）

(8)

福田恆存「大衆は信じるか」（『共同通信』一九六一年一月二十六日執筆）

(9)

大岡昇平は「常識文学論」（『群像』一九六一年一月・十二月）全十二回のうち、第六回「文学は変質したか」第七回「大衆文学批判」第八回「再び大衆文学について」で「大衆文学」を批判的に論じている。また第八回「推理小説論」第十二回「松本清張批判」では、当時ベストセラーを量産していた松本清張や水上勉を批判しているが、これも大岡の「大衆文学」批判であるといえる。

(10)

大岡昇平「大衆文学批判」（『群像』一九六一年七月）

(11)

田中純一郎『日本映画発達史Ⅳ』（中央公論社、一九七六年七月）によると、『十戒』（セシル・B・デミル監督、チャールトン・ヘストン主演、日本公開・一九五八年三月十五日）は興行成績一九五八年第一位、また『ベン・ハー』（ウィリアム・ワイラー監督、チャールトン・ヘストン主演）は一九六〇年四月一日に封切られ、九ヶ月間に渡る興行でこの年の洋画界最高の三億二千万円という空前の配給収入をあげている。

(12)

柴口順一「『蒼き狼』論争のために」（前掲）

(13)

曾根博義「『蒼き狼』論争をめぐって——井上靖の歴史小説と大岡昇平の歴史小説論」（『新潮』一九九七年一月）

(14)

井上靖「『蒼き狼』の周囲」（『別冊文藝春秋』一九六〇年六月）

(15)

大岡昇平が激しく批判した「歴史小説」として、『蒼き狼』のほかに森鷗外『堺事件』があげられる。亀井秀雄は「歴史」と歴史と小説の間（『文学』一九九〇年四月）で「事件を展開させた動力は、きわめて特殊な状況にあった朝廷政府とフランス公使をはじめとする外国の外交団との力関係にあったわけだが、鷗外はそれをも消去して土佐藩兵士に叙述を限定し、立体図を平面図に変えてしまった。だがけつしてそれは事実をとらえることにならず、むしろ上のような操作によって演出された事実でしかないこと、そこを大岡昇平は批判した」と述べ、大岡の『堺事件』批判は、鷗外が「堺事件」という歴史的事件を「平面図」に回収されるよう記述したことに対する批判であったと指摘している。

理想とする「歴史小説」「歴史小説家」のありかた

理想とする「歴史小説」「歴史小説家」のありかた

一一八

- (16) 柴口順一「大岡昇平と歴史(1)『蒼き狼』論争」(北海道大学文学部紀要)一九九二年十月↓『大岡昇平と歴史』所収、翰林書房、二〇〇二年五月
- (17) 柴口順一「大岡昇平と歴史(1)『蒼き狼』論争」(前掲)

*大岡昇平『「蒼き狼」は歴史小説か』『成吉思汗の秘密』、井上靖『自作「蒼き狼」について』の引用は初出に拠る。なお、漢字は適宜新字に改めた。

(おぞえ ようへい・関西学院大学大学院文学研究科博士課程後期課程)